ベスト・エッセイ2007

老いたるいたち

日本文藝家協会編

編纂委員＝高田宏／林真理子／増田みず子／三浦哲郎／三木卓

光村図書

ベスト・エッセイ2007

老いたるいたち

日本文藝家協会編

編纂委員＝高田宏／林真理子／増田みず子／三浦哲郎／三木卓

江苏工业学院图书馆
藏书章

光村図書

老いたるいたち

二〇〇七年六月三十日　第一刷発行

編　者――日本文藝家協会
発行者――常田　寛
発行所――光村図書出版株式会社
東京都品川区上大崎二-一-一九-九
郵便番号一四一-八六七五
電話〇三-三四九三-二一一一（代）
印刷所――株式会社加藤文明社
製本所――株式会社難波製本

©Nippon Bungeika Kyokai 2007 Printed in Japan
ISBN978-4-89528-409-7　C0095

価格はカバーに表示してあります。
本書の無断複写（コピー）は禁じられています。
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ベスト・エッセイ2007　老いたるいたち

目　次

芥川賞のころ　庄野潤三　10
あこがれ　絲山秋子　16
生きる意味問いかけた文学　西岡光秋　20
遺作について　津村節子　24
老いたるいたち　三浦哲郎　30
偉大な独学者の魂――白川静さんを悼む　谷川健一　33
上野、魚河岸　篠田桃紅　37
ダリの大発見　秋竜山　42
「永遠のみどり」　竹西寛子　46
英語での「おしゃべり」　青野聰　51
「ご隠居さん」もういない？　黒井千次　56
おごってくれた先輩　サトウサンペイ　60
「女・賢い」と「賢い・女」　なだいなだ　66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

型にこだわり心へ至る　高橋睦郎　70
合掌あれこれ　山田詠美　74
消えた海岸　又吉栄喜　79
きみに肉体があるとはふしぎだ　清水哲男　84
行列からはみ出す　小川洋子　88
銀座の二人　沢木耕太郎　93
銀座のミツバチ　米倉斉加年　99
暗闇合宿　村田喜代子　105
健康的なワニの食べ方　椎名　誠　110
石　三木　卓　115
現代詩の長女、逝く——茨木のり子さんを悼む　新川和江　120
サーカスの記憶　稲泉　連　123
桜幻想　瀬戸内寂聴　128

桜吹雪の春の宵　阿川弘之　133
さらば『居酒屋兆治』　嵐山光三郎　138
栞の気分で　白石公子　142
耳順　鶴見俊輔　146
「室内」を閉ず　山本伊吾　149
十七ccの血　佐々木幹郎　153
秋霖のころ　馬場あき子　161
白の民俗学へ　前田速夫　166
人類みな兄弟　大庭みな子　173
相撲と和歌　丸谷才一　178
正座　久世光彦　183
生を語るために死を見つめる　熊谷達也　187
銭湯と雪道で　高田　宏　195

戦場のツーショット　川村湊　198
戦争の子、東京の子　秋山駿　203
その人は黒かった　蜂飼耳　208
たかが流行、されど流行　津島佑子　215
武田泰淳の日記を読む――苦しみの根源あらわに　川西政明　220
『天皇の世紀』から日本史へ、世界史へ　柳家小三治　224
地縁　富岡多惠子　232
竹輪　川崎徹　237
父のステーション　井坂洋子　242
土の力　司修　247
ウンコの写真　佐野洋　252
トイレの消灯　出久根達郎　256
読書はじめ　林真理子　259

懐かしき死者たち　青山光二　263
肉食の思想　日高敏隆　269
眠い話　伊藤　礼　275
パレスチナまほろば　四方田犬彦　278
不死鳥のように　増田みず子　283
富士正晴氏と竹藪の家　高井有一　288
ふたりで老いる楽しさ　小田島雄志　295
「不注意にも深い嘆息」　藤原智美　300
名残の桜、流れる花　辺見　庸　305
布団乞食　石井光太　309
古池（ふるいけ）、その後　長谷川櫂　315
文芸時評の思い出　荒川洋治　318
力道山の伏せ札　村松友視　324

マキノ映画の血筋　津川雅彦　332
守られている　大崎善生　336
耳の勉強　池内紀　341
野球の「グローバリゼーション」　柄谷行人　345
夕張炭鉱で働いた文士、小山清　川本三郎　348
ようやく老後がやってきた　吉行あぐり　354
吉村昭の姿勢　大河内昭爾　359
「よそいきの街」は今　浅田次郎　364
稜線（りょうせん）を泳ぐ　南木佳士　368
わが墓参り　長部日出雄　372

装幀＝三村　淳
三村　漢
装画＝立本倫子
(colobockle)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ベスト・エッセイ２００７

老いたるいたち

芥川賞のころ

庄野潤三

銀座とのご縁について書いてみたい。

私の作品が東京の文芸雑誌にいくつか載るようになった二十代の終わりのころである。文藝春秋から出ている「文學界」の編集部のきも入りで私のようなかけ出しの新人作家と評論家十人を集めて、懇親会のようなものを発足させた。

当時、ラジオの民間放送が始まったばかりの大阪の朝日放送で番組をつくる仕事をしていた私は、この新人作家の懇親会のメンバーに選ばれた。うれしかった。会の案内が来ると、会社を休んで、いそいそとして上京した。懇親会の会場は、銀座の酒場の「はせ川」の二階の和室で、そこでお酒が出てご馳走になった。この「はせ川の会」で私は同年代の安岡章太郎、吉行淳之介と知り合い、十人のメンバーのなかでいちばん親しくなった。こ

の二人には朝日放送の仕事を頼むようになる。吉行に『恋愛作法』という連続ものの仕事を頼み、評判がよかった。そのころまだあまり原稿の注文の来なかった吉行は、朝日放送からもらう悪くない原稿料をよろこんで、「ラジオ王になった」といっていた。

「はせ川の会」に出席するようになった私は、安岡、吉行らのいる東京へ行きたくなる。私の希望を知った制作部の上役のはからいで、私は朝日放送の東京支社に転勤にさせてくれることとなる。ありがたいことであった。私は練馬区の石神井公園の麦畑のそばの土地を手に入れ、そこに家を建てる。昭和二十八年九月、私はまだ小さな二人の子供と妻とともに東京に引っ越した。

朝日放送東京支社は、銀座の並木通りにある小さなビルの四階にある。私は石神井公園の麦畑のそばの家から、毎日、銀座にある会社に出勤するようになった。その後、私たち一家は、神奈川に移り、多摩丘陵の一つの生田の丘の上に建てた家に住むようになって四十年たったが、今でもたまに銀座に出て、並木通りを歩くことがあると、とてもなつかしい気分になる。

東京へ引っ越してから二年近くたったとき、私は「群像」に発表した『プールサイド小景』で芥川賞を受賞する。受賞の知らせは、そのころ急病で倒れた母を見舞いに家族で大

阪帝塚山の生家に帰った日の夜に受け取った。

芥川賞直木賞は、今では都心のホテルで盛大に祝賀パーティーがひらかれる。私が受賞したころは、まだそんなものはなかった。私たち受賞者は、銀座にそのころあった文藝春秋の社屋へ行き、社長室に通されて、当時の社長の佐々木茂索さんから正賞のロンジンの腕時計と副賞の賞金を頂いた。パーティーなんかなかった。コップのお酒が出たので飲み、すこし物足りなかったが、うれしかった。佐々木社長からロンジンの腕時計の入った小さな箱を手渡され、「おめでとう」といわれたときは、胸がいっぱいになった。銀座とのご縁といえば、若き日のこの文藝春秋の社長室での受賞の日のことがいちばんに思い出される。心のこもったものであった。

正賞のロンジンの腕時計はどうなっただろう。はじめのうちは、ずっと手首にはめていたが、数年前、なくすといけないと思って、銀行の貸金庫に入れることにした。

副賞の賞金は、どうなった？　金額はいくらあったか、はっきり覚えていない。大きな金額であったことは確かだ。

石神井公園の麦畑のそばに東京へ引っ越すときに建てた家は、大きくなかった。三部屋あって、玄関を入ったよこの小部屋が、私の書斎であった。来客があるときは、ここへ通

ってもらった。

書斎専用の部屋が欲しくなった私は、子供の勉強部屋である洋間の上に二階を建てましすることにした。その工事のための費用に芥川賞で頂いた賞金をあてることにした。

広さはどのくらいであったか。大きくはなかったが、落ち着いた、いい和室ができた。うれしかった。バス道路に面したほうの窓からは、近くの畑や遠くの雑木林が眺められた。私はこの二階の和室が気に入った。

芥川賞受賞後に日本経済新聞からはじめての新聞小説を頼まれて、私が書いたのは、『ザボンの花』。会社の転勤で大阪から引っ越して来た私たち一家が、麦畑のそばの家でどんなふうな暮らしをしたかを、子供を中心にして書いた。

私は芥川賞を受賞して勤めていた朝日放送をやめて、一日中家にいるようになり、子供と向き合って暮らす時間が多くなった。そこで、二人の幼い子供が、いったいどんなことをして遊ぶかをいつも見ていた。子供は女の子と男の子と二人いるが、それぞれ、遊ぶことが違っている。

大阪にいる年老いた母は急病で倒れたあと、ありがたいことに回復した。この母は私が新聞小説を書いたとき、日本経済新聞をとって、毎日、一回分を読んだあと、切抜きをつ

くってくれた。ありがたいことであった。

私は大阪にいる病後の母に宛てて、東京に引っ越して、石神井公園の麦畑のそばに建てた家で暮らすようになった私たち一家の消息を母に知らせるつもりで、はじめての新聞小説をたのしんで書いた。『ザボンの花』の連載が完結したとき、母がつくってくれた切抜きの束がそっくり私のところへ届いた。ありがたかった。この切抜きを出版社に渡して、『ザボンの花』が本になったときはうれしかった。

銀座のおとなりの日比谷には、私たちがよく宝塚の公演を観に行く東京宝塚劇場がある。歌劇団から招待してくれるので、妻と二人で東京公演のたびに観に行く。それとは別に、家族を連れて行く。こちらは、宝塚宙組のトップで今度の公演を最後に退団した和央ようかさんのファンクラブの会に入会している。この会からみんなの座席券を手に入れる。

結婚している長女、長男と次男の奥さん、孫たちを招待してやる。

家族で行くときは、公演を観たあと、みんなで銀座を通り抜けて、新橋近くの和風喫茶の店「立田野」へ行くことにしている。これがおきまりのコース。

「立田野」では二階に上がり、テーブルにつき、みんなに自分の食べたいものを注文して食べさせてやる。私はいつもみつ豆。おもちの入ったいなか汁粉を食べている子もいる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.